

センペンと巡る神保町の歴史

神田神保町は日本一の古書店街として知られる本の街です。このコーナーでは神保町の誕生、どのようにして古書店が集まるようになったのか、現在まで続く歴史の移り変わりをセンペンと一緒に辿ります。

各テーマのパネル下には関連資料を展示しています。ぜひお手にとってみてください。

コラムのパネルでは神保町や古書にまつわる豆知識をセンペンが紹介しています。



専修大学図書館キャラクター
センペン

年表

西暦	和暦	できごと
1688～1704年頃	元禄1～17年頃	旗本の神保長治が小川町に屋敷地を拝領 屋敷前の通りが神保小路とよばれるようになった
1872年	明治5年	市区改正により「神保町」と名の付く区域が誕生
1880年	明治13年	専修学校（専修大学の前身）の創立
1885年	明治18年	専修学校が現在の神田キャンパスの場所に移転
1904～1905年	明治37～38年	日露戦争 中国からの留学生が急増
1911年	明治44年	創立30周年を記念し、相馬田尻記念文庫が設立。本学図書館の始まりとなる
1913年	大正2年	神田の大火（大正の大火） 専修学校から専修大学に改称
1914年	大正3年	第一次世界大戦
1918年	大正7年	高等学校令
1923年	大正12年	関東大震災 専修大学の校舎もすべて焼失
1939～1945年	昭和14～20年	第二次世界大戦
1960年	昭和35年	神田古書店連盟と千代田区との共催事業として「古本青空掘出し市」が開催 第1回古本まつりとなる
1996年	平成8年	古書検索サイト「日本の古本屋」が誕生
2022年	令和4年	第62回古本まつり開催

「神保町」の由来

江戸時代まで現在の神保町周辺も小川町とよばれていましたが、元禄年間に一帯の屋敷地を拝領した旗本「神保長治（じんぼうながはる）」の屋敷前の通りが神保小路（じんぼうこうじ）とよばれるようになったことから神保の名がついたとされています。屋敷の正面にあたる現在のすずらん通りが表神保小路、屋敷の裏門側にあたる現在の靖国通りが裏神保小路とよばれていました。

その後、明治5年の市区改正により「神保町」と名の付く4つの区域が誕生しました（表神保町、裏(通)神保町、北神保町、南神保町）。そして関東大震災後の土地区画整理でいくつかの区域が合併し、現在の神保町一丁目～三丁目となりました。

多数の学校が成立

専修学校（専修大学）は明治13年に創立し、明治18年に現在の神田キャンパスのある神保町へ移転します。すでにあった東京大学、学習院大学に加え、同時期には明治法律学校（明治大学）、英吉利法律学校（中央大学）日本法律学校（日本大学）など多数の学校が神保町近辺に集まりました。日中は官公庁で働く講師も多かったため、職場に近い神田地区が立地として好まれたようです。

学生が増えると書籍に対する需要も増加し、教科書や参考書をはじめとする新古本売買を目的とした本屋ができ始め、ここに古書店街の基礎が形成されました。

学生の増加

日露戦争前後から私立大学、専門学校などの整備が行われ、入学を目指す学生のために予備校も多数設立されました。日本人学生だけでなく、中国からの留学生の数も急増し、周辺に下宿する学生たちの神保町古書店街への需要が増大しました。

特に留学生は在学中には教科書・参考書を求め、帰国時には日本の学術書を多く買い求めるため、古書店の新たな顧客として大いに歓迎されたようです。

また、これをきっかけに神保町に中華料理店が多く出店し、留学生たちの憩いの場となりました。現在もそのときに創業した中華料理店が営業を続けており、チャイナタウンの面影を見ることができます。

大火と復興

神田地域では火事が多く、古書店街にも何度も火の手が回りました。その中でも特に影響が大きかったのは、大正時代に起きた「神田の大火」とよばれる大火事と関東大震災での火災でした。

大正二年の大火は二千八百戸を焼失させ、書店街も消失しました。この大火からの復興で大きな変化が起こります。

ひとつは、それまで主流だった和装本を中心に扱う書店が閉店を余儀なくされ、下に見られていた洋装本屋が躍進したことです。洋装本への転換期がおわり、和装本の流通・在庫が枯渇していたために新たな商品の補充ができなかったためでした。周辺学校の図書館も焼けたため、蔵書の補填のために洋装本系の古書店に注文が殺到したことも追い風となりました。もうひとつは店舗の大移動です。大火前は現在の神保町交差点～九段よりの南神保町（神保町二丁目）が古書店街の中心であったのが、火事の後には土地代の安い現在の神保町一丁目（通神保町）に集中するようになります。これが今日まで続く古書店街の土台となりました。

こうして復興したのもつかの間、大正十二年九月一日に起きた関東大震災と関連する火災でまたも被害にあいます。

東京に集中していた印刷会社、製本会社、出版業者などが被災し、壊滅的であったことから新本を作ることができない状態でしたが、古本は他の地域から仕入れて売ることが可能でした。そのため、古書店は比較的早く立ち直り、同年中に営業を再開した店もありました。出版再開まで本が絶版同様になってしまったことから神保町へ本を求めて訪れる人が殺到し、また神田の大火の際と同様に近隣の学校も失った蔵書を収集するために古書店を頼りました。

この震災を経て、古書店側も客側も失われた資料を収集・保存することへの関心が高まるとともに、資力や販路の拡張で古書業界は大きな飛躍をとげました。

和装本と洋装本

和装本

和紙で作られた本。ページが袋とじになっているのが特徴。
背表紙が無い。

洋装本

一枚ずつのページからなり、紙の表裏に印刷している本。
丈夫な紙で表紙・背表紙がつけられている。

ここに展示しているのは専修大学の前身、
専修学校の教科書だよ
和装本も洋装本もあるね



昭和にかけて

先の震災からの復興により新本が徐々に出回るようになった頃、円本（1冊1円で格安出版された全集類）や文庫本の出現などで、学生向けに教科書を扱う店と高価な叢書や美術書等を扱う大手以外は不況に陥りました。昭和恐慌後は職を失った人が古書業界に参入し、さらに古書店が神保町に集中しました。新たな客層に向けた販売戦略としてデパートでの即売会が各地で行われるようになりました。

第二次世界大戦の空襲からは奇跡的に被害を免れ、また、焼けてしまった区域でも露店での古書販売が盛んに行われていました。

書店街が飽和状態になったことで昭和四十年前後からは高層建築の傾向が現れました。

円の価値

貨幣の価値は情勢によって変化しています。

1冊1円の円本はどのくらいの安さだったのでしょうか。

この時代の図書や雑誌類の価格を見てみましょう。

円本ってすごく安かったんだね
他にも気になる品物をみてみよう



古本まつり

神保町古書店街の古本まつりは、町に活気を取り戻すため戦前の露店を復活させてはどうかという試みからはじまりました。

神田警察署に露店出店の許可は得られませんでした。が、千代田区の協力もあり、昭和35年に神田古書店連盟と千代田区との共催事業として「古本青空掘出し市」が開催されました。これが第1回の古本まつりです。

古本まつりは今秋で第62回を迎え、第1回と同じ10月28日から約1週間開催されます。この機会にぜひ足を運んでみてください。

10月は古書月間

「古本はとても楽しい書物文化であることを一人でも多くの方にご理解いただきたい」という願いのもと、全国古書店連盟が平成15年に10月4日を「古書の日」、10月を古書月間と制定しました。

神保町の神田古本まつり、小川町、東京古書会館の洋書まつりなど、様々な古本まつりが開催されています。



現在の神保町

平成の時代になると、大型チェーンのリサイクルショップの台頭、インターネットの普及による本離れ、古書販売サイトの出現など、脅威が同時期に現れ、古書店業界は苦境に立たされることになります。

東京の古本屋の調査事業を経てIT化が必要だと確信した東京古書組合は、ITに強い十数人の古書店店主が中心となって古書検索サイト「日本の古本屋」を立ち上げました。1996年から20年をかけて、現在では在庫点数600万点を誇る商品データベースを構築し、古書の通信販売も行っています。

新しい販売形態を取り入れながら、古書店街は現在も神保町にあり続けています。

黒っぽい？白っぽい？

「黒っぽい（本）」とは、刊行から相当年数を経過した
絶版本のことを指します。

これに対し、刊行後日が浅く、定価でも入手可能な本を
「白っぽい（本）」ということがあります。

ガラスケースに展示している貴重書は
「黒っぽい（本）」だね！

